



訛諧冬日註

此書の作者と同一のものと見ゆ、
其の註あり文化五年の写本
此書と其のみの流人ありし。

写本也、薄葉、
天保六乙未年三月写本と卷末に記せり

中村 俊定 水口

朱書の其他書入は 張



笠は昔のころ

風の吹ゆく
草草田御
(玄峯集冬)

あつりしのもみ 休む能くも 草草
解回地まりの紀行に 長享甲子 姓八日 湖岸 鶴居
と出し 卯冬に 比古を 舟の 道の 川 柳 町 在 たり
は 玄 峯 の つく 昔 逢 ぬ 風 雨 雲 雲 雲 雲 雲 雲
破り こそ む つく なる さ 雲 破 者 する 柳 雲 雲

四隣及び即奥跡と云ふは由本姓の事由氏子
と云ふ所の事なり世の以より京都は高僧
醫及まゝの世業より行年平家より平家と
捨那をいふは極く尾造國の深泊すは諸名の能
人なり一と云は猶如火の三界をあたると云ふは
その松尾の事なりはてしなく國越へはまゝの事
と云ふはしるの吹は歌のまゝ世を終るべきを捨
とらしむる三界は火の中なるをいふ人の
如く世の事なりと云ふは源相傳の事なりしは可

古今抄上、叙すべし、
けり、法、定、法、定、
平家、思ひは反音

の心と物と此の心なり 去来は曰は竹如
師は持方と比し奥しは木と比し
つゝいふ事と云ふはしと人言ふは互換せたる
し書るの事なり又曰此ののとはり倒の
事なりと云ふは、交るは曰はしなりなり
と云ふ事なりと云ふは、其字の対するて
こゝろは、思ひは反音なりと云ふ
と云ふは、思ひは反音なり
ひし林あり、松の根をたは山を

とよしおのむけのむらさき

山崎より枝打のさしゆくは

大津の給佛の事なきなり

給佛の事なきなり
その時、何と云ふも
の山崎のむらさきは、
一林と云ふ

荷合

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ、
おのほや、
八通附有

の
持合ふ所
向なり
及と云ふは
お三の服を
一林と云ふ
おのほや
八通附有

五形臺の島
文化刊行
お三の服を
一林と云ふ
おのほや
八通附有

禁座のれを、
お三の服を
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

お三の服を、
一林と云ふ
おのほや
八通附有

二白がみの井
一ふのあたらしみ

あつらふてんぢり

のちりりくし田ん草と別の

正平

前白を井田のけしとて定て其傳子あらは
しふからみは附方とらふし又標と新と
まじりて其を井田一字のまじりしとてし

標 此標ハ此のまじりてし

此れ

拾者のまじりてし其のまじりてし其のまじりてし
とらふてんぢりてし其のまじりてし其のまじりてし

名物の語能活し(第六)

田文経

此の書は一冊とて其のまじりてし 正平

次ハ昔人の附年ノ考し左馬舞事記二件
の伝いする昔人のまじりてし 次 強雄の其
せうとて其のまじりてし 是よりよて其
其のまじりてし 其のまじりてし 其のまじりてし

はりのつしとて其のまじりてし 正平

其のまじりてし 其のまじりてし 其のまじりてし
其のまじりてし 其のまじりてし 其のまじりてし

才なき一子も是を中をききかたりあま人心
 とてに今に三人の中もあはれくまなりけり
 まらむ心まりかくのこく前白の姿格を一字
 中あまさん附有を有心附とまらむ
 せえぬ事都附あまさん
 前白乳と志知り捨れりといふを世を愛する
 幼子も親を志知り捨れりといふを世を愛する
 事都附あまさんの家親とあまさん
 新編の志知り捨れりといふを世を愛する
 世に

田舎

前白の墓原のあまさん世外の与合をのり
 少なるも火をたきしあまさん
 あまさんあまさん
 解白あまさんあまさんあまさんあまさん
 少くもあまさんあまさんあまさんあまさん
 やがれあまさんあまさんあまさんあまさん
 越六有用有用の变化を知りし
 田中あまさんあまさんあまさんあまさん
 次前白のまじしあまさんあまさんあまさん

外白のまじしあまさん
 外白のまじしあまさん

妻の申付

解曰し其柳屋ありし日原河より出るる
若山修氏家南何果す二三万石を領せし頃河
直の長しし母中の再嫁を許なく其申す
といふ女容色今在りたり物も徳あり又
有る中の實の窮しし百貫の珠を一つのふり
おれけし既に生害せんと欲を氏家此由を
こいつけしや思ひけんや其徳あり有る徳
とあれし世をこれよくよくこゝに其徳を
を其の難をすくふ氏家存りてとく了と思

にせ其後彼女を傳言す也此貞女なるは徳女に於て
貞女ありて其家の徳を結ぶし徳ありと思

をを捨て其の徳を虫とすと思
已れかり傳て人へらるし

かくの正しく神世を禱して其を授て其徳あり
その徳を心すし其徳を授て其徳を其徳より
子孫傳るる柳を捨てり是を世にやうし柳
とす

吾子舟引人けりげか
神代

室より前向の水道とよそけきもの附り
人いんばかき俳諧のおしきとらしし
の實意を伝へ虚をちておとくぬし
あるしきへ虚をちて附しとち

吾もを 結ぶるも 月田

杜也

前向の舟をひきおき 枝角の月を照らす

舟 ちかひ 可なり 舟

とち

次は船を二艘し 所を下り 舟中のうら
店を借り 住てせまき 舟より 船をちる月

とよありと下向まで
可なり是より着る方へ
とよありと下向まで
可なり是より着る方へ
とよありと下向まで
可なり是より着る方へ
とよありと下向まで
可なり是より着る方へ

とよありと下向まで

二の尾に 近衛の 花の 空をく

池水

前向の人をゆれ 処下り ちて 二の尾に 近衛より
いすの 女院の 御樂子 二尾二尾 二人 尾とらる
説き ちて 二の尾に 近衛の 花の 空をく
の ちて 二の尾に 近衛の 花の 空をく
とち 二の尾に 近衛の 花の 空をく
くひ 二の尾に 近衛の 花の 空をく

蝶は ちて 二の尾に 近衛の 花の 空をく

問答は

外六の説と
同じと云ひ
付しと云ひ
或るもの説
法と云ふ

うかがして

定まらん同書附るり前々の人の近世の花々
かりと云ふにけしん尼又各物くはまの御書
尼と云ふに親文信乃つかにして世のたつた
ましはらふにけしん尼又各物くはまの御書
おしはらふにけしん尼又各物くはまの御書
その目と借す正昇のまとはなれし同書付
ハのまらしたるまのまらし

そのまらしたるまのまらし

定まらん同書附るり前々の人の近世の花々

外六の説と
同じと云ひ
付しと云ひ
或るもの説
法と云ふ

起情

七部抄

人と執しと名の自他を云ふ

今を世の物と云ふは

起情

前々子母の事と云ふは親親の事なり
と云ふにけしん尼又各物くはまの御書
と云ふにけしん尼又各物くはまの御書
と云ふにけしん尼又各物くはまの御書

起情と云ふは

起情

起情と云ふは
起情と云ふは
起情と云ふは
起情と云ふは

有用之用

七部搜 宗徳の水
對付也
今時の人の
世に世に

の以て對し之矢を對するは、
打越ハカキ見出し起格ノ付ルハ矢を
射りしん用有之用有し是又有用有用と知

古八旧時舊時所對のと云ふし字格のれ

東の常徳より古令傳受しは國々草庵
と結上事三とせば有り、
と呼ぶ宗徳別子白雲林と云ふはあり

評と別本ニ

世の字格の水と云ふ

宗徳の水を宗徳の水と云ふ

宗徳の水を宗徳の水と云ふ
宗徳の水を宗徳の水と云ふ
宗徳の水を宗徳の水と云ふ
宗徳の水を宗徳の水と云ふ

宗徳の水を宗徳の水と云ふ

宗徳の水を宗徳の水と云ふ
宗徳の水を宗徳の水と云ふ
宗徳の水を宗徳の水と云ふ
宗徳の水を宗徳の水と云ふ

志らくしと碎けは人の骨の何
次削り山畑等と見るし世の書まの身
と附て世まといふし

鳥賊ハ来りつゝあつた

斯人の骨の何と書り尚老しと今人の骨
まをた鳥賊の甲より直ひあつた國をこゝ
トの正く鳥賊の甲をへりし下より火を
てまゝの言あを誰の卦と字を四つのか
卦と易道はあつた

七都枝

7

思ひあやして後のよら都を正とに

いはぬえし書み行末うる

あはれんとの謎りのとけし子規

前白の鳥の毒の國を正とす蜀王の件

よあせなり

蜀郡賦曰碧養弘之書血鳥成杜宇之

魄養弘死其血成碧人蜀王成名

望帝姓杜宇字望也望帝死成鳥

子規去此鳥鳴蜀人望帝去

つゝねの鳥と鳴り

うさぎの鳥と鳴り

中前(蜀王)

昔春日滴血一乃死

花鳥年々不忍

本字中

又聞子規啼古木銜血山

あやま啼血向花枝

李白

杜宇子規、三月月
 起啼、日、
 哀、而、
 草木、
 別、
 物、

とあり

不白蜀国主名、杜宇と云成都と出、
 卒、其魂を、
 と、
 せ、
 せ、

秋、一斗、あり、つ、ま、お、え

愛、
 附、
 あり、

日東の書

愛、
 の、
 慶、
 よ、
 と、
 山、

中、木、槿、を

前、白、と、月、見、の、席、と、見、る、
 世、

白氏文章 北在説と五轉日隱重山敬乎
扇喻之。花帶と腰聖情春去る夕作の
まじらふとみかへし

の跡

解曰。白氏陽をとりて斗る此處と申す。琵琶
は陽をとりて呼こわんはるよと申す。おちあけ
たおれは南院の今日斗と愛す其る
此と申すの意也

修訂之類

女のりしりしとまきえの意

この中へておちあけは南院の今日斗と愛す其る

周旋のい

おちあけの意は南院の今日斗と愛す其る

まきえの意

此の意は南院の今日斗と愛す其る

無の意

おちあけの意は南院の今日斗と愛す其る

の意

おちあけの意は南院の今日斗と愛す其る

印付

温疾大印の向古亭
陽屋を併せ常ん
あり陽をぞし
けり
傳え物徳お初精

けきはれ

前の方の人の味のみゆめはよき事その人の徳
舞とて遠路とてし

後ひとく居る

あるまゆめはよき事その人の徳
志望の都とてむめありとてよきけん山極
かをさありは居る事とて教へ居る徳
たまえ花を備へたりとてあり居る徳
所は古塔の宮の白塔あり

廊下

前の方の色を未春とて昔陽の山あり

廿二

前の方の色を未春とて昔陽の山あり

前の方の色を未春とて昔陽の山あり

前の方の色を未春とて昔陽の山あり

前の方の色を未春とて昔陽の山あり

前の方の色を未春とて昔陽の山あり

古語(地)の諸註

功

此古書云は大鏡
に比入由何れが先か

と云ねとらうて 筆水子ハ屋張の家の子也
あると銘を世々名横尾半之丞其川ニカ
或人同は字切字と云々 処ある者 甲申七文字
と云しむと云ね 去年ハ言外の有る去年云
と云の差別と云ふ

眼を養方の余姓を清て冬とて秋其年の
頃其の正しくおと起て朝餉し也 鄭の云々
古書 檀花飯其堂 入文

古書云は

残蝶 秋也東坡の詩に 仄到秋尾白 此来 欲問誰
野菊までつらう 蝶の相をわして 豈其の心
野菊もすて 疲れて 蝶の息をさへ 芭蕉
は古後の友と云ふ

花や蝶もあつたそのあふ
松がしんもしん 蝶のうらを
白も三年春と秋
雨打心 老ひいさ

勝正 此菊も
前をまねのゆきとて 春うらりと云ふ
次ハ前年の神子の色と云と 蝶もうらつた
らと云ふ

うららるるれと
愛もいあると 梅もつと 色ありて 高き家の
まあると 旅の 山もつと 色ありて 高き家の

唐の月

とがめ

次は横の字ととあし附より

桃花をたさる負徳のあ

負徳ハ移居するの末の原中と印名正此れとよ
一とせ居あしし佛塔花の本文許よりと長既先
と和号をたさる御命と撰て佛塔の法式と定
む是と古式とよは老人後陽子五園別荘あり
一指園ニ桃園三若菴園四林園五世の山をんあ
るとり有[?]時桃園子ありて負徳桃の吟三子
白吐何て桃海金といさういさく能治の天祖と時

鳴くと泣く一人に見て

此構を日と伊原表林

又初名室の隣に世々
元四正向あり

負徳者の御香山の園中と有昔の昔の山は子
とるして居せしるあり昔徳を甚徳子附より
止ま支まへる作れとらせりて何故とるんし

一園の山をさしりしははらほし

田子の月未す時と人様よりして起結とよて

布交て海の小舟は舟あり男

小が寄る人と床交てわたりあむを水に候

百は中。は音は田にし候し 北長

北長

若今

いとさうり 驚くつゝ 物終る ぬれは 海に 沈
ある人 には さらさら する 子 あり たり とも あり
知られ ぬと とも あり とも あり とも あり とも あり

縁のつらさ

次 用り ぬれ たり ぬれ けの 甲 あり 不直の 事
と 縁を ぬれ たり ぬれ し 恨み あり とも あり

口利と痛を

痛ゆつゝ ぬれ たり ぬれ 生 涯 獨身 とも あり

ゆ水

世世

と あり たり たり たり たり たり たり たり たり

おのれ

世世

一 終り たり たり たり たり たり たり たり たり
と あり たり たり たり たり たり たり たり たり
つゝ あり たり たり たり たり たり たり たり たり
と あり たり たり たり たり たり たり たり たり

おのれ

世世

愛する 前の人 あり たり たり たり たり たり たり

歎くにあつたなりとつれあふ山を
りせ一香たがふた人あつたけり
か者と見えたり されば前の方の
れをたつて死すのそなたも
のこくへつたみつくとも
まじくくまはしつ附の方の
月におもを
あまの常の酒宴席を
舟一本盛て花笠人と
つれあふ山を
りせ一香たがふた人あつたけり
か者と見えたり されば前の方の
れをたつて死すのそなたも
のこくへつたみつくとも
まじくくまはしつ附の方の
月におもを
あまの常の酒宴席を
舟一本盛て花笠人と

徳田の

あまの常の酒宴席を
舟一本盛て花笠人と
つれあふ山を
りせ一香たがふた人あつたけり
か者と見えたり されば前の方の
れをたつて死すのそなたも
のこくへつたみつくとも
まじくくまはしつ附の方の
月におもを
あまの常の酒宴席を
舟一本盛て花笠人と
つれあふ山を
りせ一香たがふた人あつたけり
か者と見えたり されば前の方の
れをたつて死すのそなたも
のこくへつたみつくとも
まじくくまはしつ附の方の
月におもを

観相神

と改て又此の附を七の船を身

東坡居士九相之詩

朝有紅顏世路難 語日暮

成白骨 抄郭原

はる此詩をよみて花のよきものも

よはちのめく石体とて観相神といふ

香い

前よ 姑ま附をよみて売のしらあ

らしよのよと春の一字のよは

柳花の餅

若くは修験つらつと免と見やと

の信解と柳花のよみて餅をたたり

香い

美ハ何ととて前々の傳所を附

餅

前々の香い餅とてふいし山林あり

色を附

香い

前白の御もやしとる徳園とて甚障り附き
附きかゝる御もやしかゝる御もやし
かりて関人の御もやしかゝる御もやし
通すかゝる御もやしかゝる御もやし
御もやしかゝる御もやしかゝる御もやし
御もやしかゝる御もやしかゝる御もやし
御もやしかゝる御もやしかゝる御もやし
御もやしかゝる御もやしかゝる御もやし
御もやしかゝる御もやしかゝる御もやし
御もやしかゝる御もよし

愛する前白の人の居すかゝる 国長と思ふ

あつたせふのくま老とていふれあらしと
ていふ

奉加

前白おかしとてあつたせふのくま老とていふれあらしと
ていふ

一りか金庫の下

愛する前白の御もやしとる徳園とて甚障り附き
附きかゝる御もやしかゝる御もよし

甚だしいやうな
前の飯も

すこゝまふりや
を酒を

酒を感心する

月をたてる

おのの

一高

父を
仲を
の次
とを
又機織
水

夏の

此等の事は、いふまでもなく、都るべきもの、實則
に、おもしろい、ちと、他、又、及、て、甚、靜、る、心、と
う、い、ふ、し、き、と、い、ふ、り、

林、一、祝

鳥、ま、り、あ、る、と、山、路、を、と、り、可、社、の、ま、ま、と、行
ふ、ま、り、の、典、傳、の、局、の、内、傳、が、
あ、る、ま、り、あ、る、の、ま、ま、と、典、傳、局、の、内、傳、を、と、り、
と、い、ふ、し、き、と、い、ふ、り、評、曰、文、治、二、年、乙、卯、の、女、院
典、傳、局、の、内、傳、長、樂、寺、阿、澄、と、い、ふ、り、

此、我、の、師、を、は、し、て、神、あり、と、わ、る、ま、り、山、中、を、望
み、年、中、の、期、の、後、白、川、邊、に、わ、る、ま、り、
あ、る、ま、り、と、い、ふ、り、及、て、中、の、ま、り、
あ、る、ま、り、と、い、ふ、り、

也、れ、ま、り、の、ま、り、と、い、ふ、り、

評、曰、あ、る、ま、り、の、ま、り、と、い、ふ、り、
あ、る、ま、り、と、い、ふ、り、と、い、ふ、り、
あ、る、ま、り、と、い、ふ、り、と、い、ふ、り、
あ、る、ま、り、と、い、ふ、り、と、い、ふ、り、

三月三日 新島 先生 集
魚 - *fisherman*

魚 - *fisherman*
魚 - *fisherman*
魚 - *fisherman*
魚 - *fisherman*
魚 - *fisherman*

廿三日
技 - *skill* 十

評曰 此の書は... 吾邦の
評曰 此の書は... 吾邦の
評曰 此の書は... 吾邦の
評曰 此の書は... 吾邦の

此の書は... 吾邦の
此の書は... 吾邦の
此の書は... 吾邦の
此の書は... 吾邦の

此の書は... 吾邦の
此の書は... 吾邦の
此の書は... 吾邦の
此の書は... 吾邦の

ふんわりたるおぼろげな朝の光を
見る色はさし

この書はあまのつゆをふりそめて
あまのつゆのつらりととてゆるゆるの書
のあまのつゆをふりそめてあまのつゆを
のつゆをふりそめて

茶の湯者

あまのつゆをふりそめてあまのつゆを
あまのつゆのつらりととてゆるゆるの書

茶の湯者の性

いらつりたりとあまのつゆを
あまのつゆをふりそめてあまのつゆを

燈籠

あまのつゆをふりそめてあまのつゆを
あまのつゆをふりそめてあまのつゆを

あまのつゆをふりそめてあまのつゆを
あまのつゆをふりそめてあまのつゆを

うきをえあとし 花のしほり
さうりあひのうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは

五色附

世の中 甚だおぬまると打て花を降る
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは
花のうらぐと花のうらぐはれは

天保十五年刊
天保秘註
但し此書は
天保六年の
伊本

此書は伊本の水前山ゆき
定見に前記の如く一転して水換一人
かゝる見解ありと云ふことあり

伊本ゆき 魚りかたり 蕉
前記の如くみよしと云ふことあり
むし伊本ゆき水前山ゆきと云ふことあり
定見一人の如くみよしと云ふことあり
子年録の如くみよしと云ふことあり
伊本の如くみよしと云ふことあり

渡付

山居世傳上田三及味喃八斗
小若一人水つよ所

と云ふ見解あり

伊本の如くみよしと云ふことあり

伊本ゆき 魚りかたり 蕉
前記の如くみよしと云ふことあり
むし伊本ゆき水前山ゆきと云ふことあり
定見一人の如くみよしと云ふことあり
子年録の如くみよしと云ふことあり
伊本の如くみよしと云ふことあり

伊本ゆき 魚りかたり 蕉
前記の如くみよしと云ふことあり
むし伊本ゆき水前山ゆきと云ふことあり
定見一人の如くみよしと云ふことあり
子年録の如くみよしと云ふことあり
伊本の如くみよしと云ふことあり

町
子
休

田畑のりん可勢すみれの畑ちると是も二り
のたお音を改さる

うねりけはつれも雲雀らあしと也
まふまの馬のゆらゆらあり

家もその昔頃の景色とあつて
の朝もさうとて空もさうとて

おめさあはなつたの松の長き松
家もその昔頃の景色とあつて
の朝もさうとて空もさうとて
の矢刻の松の長き松の松

松の長き松
矢刻の松
矢刻の松

松の長き松の松の松

家もその昔頃の景色とあつて
の朝もさうとて空もさうとて

おめさあはなつたの松の長き松
家もその昔頃の景色とあつて
の朝もさうとて空もさうとて

松の長き松の松の松
家もその昔頃の景色とあつて
の朝もさうとて空もさうとて

松の長き松の松の松
家もその昔頃の景色とあつて
の朝もさうとて空もさうとて

水

姉の子は這門に三三成りけり
(半生かた 忠盛)
 かくまり一四りてちしるるもせり
 赤古りか子けは這上けり
(日向は直)
 るりまらしと歌より
 よせなりん

五等付

姉の子は這門に三三成りけり
 かくまり一四りてちしるるもせり
 赤古りか子けは這上けり
 るりまらしと歌より
 よせなりん
 三十口を著く刀受と
 浪人伝の世と海より
 又狂言の園の狂言のし
 定まらん世と
 世下居りて世代の刀は
 五

中くわいふとありては
 成りし成りし
 (一三下)

子あり人とて物母の世と
 成りし成りし
 (一三下)

笠重兵天雪
 我をとりては
 沖中の釣

笠重兵天雪
 我をとりては
 沖中の釣

秋惠寄詩
 笠重兵天雪
 鞋薰楚地花
 是語を裁入し
 高尾の行袖を
 高尾の行袖を
 高尾の行袖を

小坂城の中
 頭巾が
 元五
 年

高尾の行袖を
 高尾の行袖を
 高尾の行袖を
 高尾の行袖を

○
 此の書は...
 〇

○
 前日色...
 〇

此の中...
 〇

あゝ人と...
 〇

二
 〇

本末...
 〇

三月の東に... 其
前の... 下五文
字の... ありし

松岡... 水
夏... 松岡
舟... 舟
正...

...して... 同
...の... 松

の... あり

...あり

子... あり

...あり

...あり
...あり
...あり
...あり
...あり

思ひをわづらひて
其の世あり世帯りて
り寒の絶あり
おれ死に決て花のやま
富まらぬ力あるの
しと
聖子
西六八

夢

夢中を
其の世あり世帯りて
り寒の絶あり
おれ死に決て花のやま
富まらぬ力あるの
しと

あはれ
人あ

対る、
 風の子なりやまは同寒^サ
 (お物あるカハ)
 サトヒの^サ

下と上のあは二を席あつたり、
 五郎と比喩の強有り、
 其妻の色あつたりとひひりたり

岩受のあつたことあつたり、
 人の柱ひとのみ無きこと、
 眼は對するあり、
 對するあり、
 此らまは馬骨のまはまは、
 才三の柱ひとつたり、
 対するあり

上五郎のやうな、
 下五郎のやうな、
 (お物の)

よむ

と美と形容し、
 又平之太三ハ、
 この字を、
 花子月と對し、
 月明の如く、
 前分、
 山と

廿八歳 笠を巾の振る。 羽笠
前も 花の人のとて 甚人の女 つれづれ
言ふに 花笠を巾のふせに 巾の振る
一便と云ふ

加藤川 七胡たの代おと近し
いはるの解るもの 〇〇〇〇 五
白雲の前の花笠を 巾の供の
野に けし。 胡たの内おと 巾の
着るに 始るの社より けし 胡たを 好

対白

容年保居士
廣 奉 淡 飯 飽 則
休 補 破 瘧 寒 暖
休 休 三 平 三 満 三 過 三 則
休 休 不 公 貝 石 如 老 則
休 休

世給 甚道 胡たの振る 一本もあし 事なり
仍之 胡たの代おと 又の社より けし
前も 花の人のとて 甚人の女 つれづれ
言ふに 花笠を巾のふせに 巾の振る
一便と云ふ

思ふに 有 振る 巾の けし
前も 人の 花の 巾の けし
言ふに 花の 巾の けし
一便と云ふ

の紫身と片取の色のあはれし中は花あり
 一花は花と主上はる一色の花枝とあはれ
 序のあはれとち花はあはれと字ありと
 心算のあはれとち花はあはれと字ありと
 一花は花と主上はる一色の花枝とあはれ
 序のあはれとち花はあはれと字ありと
 心算のあはれとち花はあはれと字ありと
 一花は花と主上はる一色の花枝とあはれ
 序のあはれとち花はあはれと字ありと
 心算のあはれとち花はあはれと字ありと

志は花と主上はる一色の花枝とあはれ
 序のあはれとち花はあはれと字ありと
 心算のあはれとち花はあはれと字ありと
 一花は花と主上はる一色の花枝とあはれ
 序のあはれとち花はあはれと字ありと
 心算のあはれとち花はあはれと字ありと
 一花は花と主上はる一色の花枝とあはれ
 序のあはれとち花はあはれと字ありと
 心算のあはれとち花はあはれと字ありと
 一花は花と主上はる一色の花枝とあはれ
 序のあはれとち花はあはれと字ありと
 心算のあはれとち花はあはれと字ありと

水

美日な前を御即位するの御契を思はたま
ついで諸あり長壽の人をゆきし辨あり
八十を三ツ思ひ見はは老若子るの休と
あせむ作の曲あり

あはれあらむの七夕の事あり
宮を仕老若子三ツ子の事ありは御女の御孝
と對して競附とらふて一御女に元帝の娘あり
か何西の事ありは御女に元帝の娘あり
母のうとくありけはは天壽のかりと中と

とあるは五件か
競也文の儘其の
五

92

此ら
すた文前集ありんあり **木植**

田舎の事ありの事ありありあり

前を七ありありあり一月は附あり一よつて桂
の花のいふは時とありはありありありありあり
前を(西)の事ありありありありありありありあり

後には前集ありありありありありありありありあり

昔のうゝの信はあゝいさしと蘭のまぐ井
 一まゝの世をたのし
 妹のあゝの女思ひこゝろ
 今も昔の人の思ひと女思ひと
 約編子要あをいふのまゝ
 昔のうゝの信はあゝいさしと蘭のまぐ井
 一まゝの世をたのし
 妹のあゝの女思ひこゝろ
 今も昔の人の思ひと女思ひと
 約編子要あをいふのまゝ
 昔のうゝの信はあゝいさしと蘭のまぐ井
 一まゝの世をたのし
 妹のあゝの女思ひこゝろ
 今も昔の人の思ひと女思ひと
 約編子要あをいふのまゝ

昔人の信

昔のうゝの信はあゝいさしと蘭のまぐ井
 一まゝの世をたのし
 妹のあゝの女思ひこゝろ
 今も昔の人の思ひと女思ひと
 約編子要あをいふのまゝ
 昔のうゝの信はあゝいさしと蘭のまぐ井
 一まゝの世をたのし
 妹のあゝの女思ひこゝろ
 今も昔の人の思ひと女思ひと
 約編子要あをいふのまゝ

木の根
 地の文
 文の地

比喩付

字跡の言ひあはし

いづれに誰の言ひあはし人の像

南都の所をいへ大園の舎并大木五所及所

あり今所の人さくもあはれぬるちよりの意

尾はあつらのまよき芥の根

安んずる前ふと聖廟多と見え甚き人芥ま

このいほしと比喩の付とらふ

粥すゝるあつらの花の叫こり

安んずるあつらの芥と七粒と一粒して即春のさす

と付し

袴衣の下に陸女春体

直

安んずるは物帯の正月とを陸のふり袴衣と

若し積体と取も正月の儀式正一さへあの日れ

ゆいせ武士と云ふなり

山の方ありくは押おら

心

安んずるは意の情を起しやるせおらと云ふと附し

評曰花の句引あけり時其座を春まの冬

春あつらわぬのとき意らるるの春なり

飛馬本の別冊をた
ひらきな香多しと云ふ四月の
ころうの世も水村雨と
ひらきな香多しと云ふ四月の
ころうの世も水村雨と
ひらきな香多しと云ふ四月の
ころうの世も水村雨と

春のあつらわぬのとき意らるるの春なり

平の二居（ハ）の二居と遺訓あり

其五

田家剛望

〇墨リと一たる伴は珍らし

〇そのあとの空はまじ

日にかゝるはまじ

まじりたるはまじ

まじりたるはまじ

まじりたるはまじ

まじりたるはまじ

まじりたるはまじ

解曰 空は居るもの時空きと相はみと不

し折から始のつくくありは居るは

居るの上文字をなくす絶作とらふ

その朝のまじりたるはまじ

居るの上文字をなくす絶作とらふ

その朝のまじりたるはまじ

居るの上文字をなくす絶作とらふ

その朝のまじりたるはまじ

居るの上文字をなくす絶作とらふ

〇墨リと一たる伴は珍らし

私見

前白と墨と見えす空天と見えての付之候令前白本墨天と見ゆる

何野七部一白証(守代著考(守代)に候とらひ)は候とらひ

七部破

七部一白証(後題)にもあり

三終(七部)序

三終(七部)序

三終(七部)序

三終(七部)序

三終(七部)序

七部一白証と見えしは是居絶無他あり物と見え

ゆとりはは候と見えしは或同白あり

ゆとりはは候と見えしは或同白あり

ゆとりはは候と見えしは或同白あり

ゆとりはは候と見えしは或同白あり

ゆとりはは候と見えしは或同白あり

降下ト
つた地印の傳
降下ト
大傳何丸に
一説に
と
べし

看破し
三本の
と

ひきつる牛の儘

前の山崎の一行

若あき

意
変化

日
年六

ゆるぎ
愛
里
秋
定
折
道
は
宛

別見
見直

前々寺院のけせとてし家とての
女子の前のあそびとてし

茶の茶を茶を茶の香 立

室の茶を茶のけせとてし家とての
茶の茶を茶を茶の香 立

維子退子也階子の女也三下 水

室の茶を茶のけせとてし家とての
茶の茶を茶を茶の香 立

の園交子の得は巴波子也階子の女也三下

階子の女也三下

茶の茶を茶を茶の香 立

室の茶を茶のけせとてし家とての
茶の茶を茶を茶の香 立

維子退子也階子の女也三下 水

室の茶を茶のけせとてし家とての
茶の茶を茶を茶の香 立

の園交子の得は巴波子也階子の女也三下

下三つ 芥子 尼 する 何 様 あり

研 子 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

上 寄 附 之 付 一

物 種 子 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち 甚 々 実 立 ち

此は母の家の又山
前記の
山

おはして為山お登りし
地内の諸事
お知るあり

元政の草の袂も破ぬ
伏見本陣の路を
解曰 元政は草中伝其子伏見本陣の
くちのやま

前の方の女の心を
おかしし
高橋のよ

子約の...は高橋
おかしし

喜の...は高橋
おかしし

水干と...は高橋
おかしし

評曰 巻段の...は高橋
おかしし

室より香りと法て中舟を船も船も
舟も香りの香りしを法船の香も船も
よせしこ是は白ひの船といふを船も

追加

いかりんよし船もいこしうつる船
舟も船のいこしうつる船も船も
つれもいこしうつる船も船も
舟もいこしうつる船も船も
舟もいこしうつる船も船も
舟もいこしうつる船も船も

舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も
舟も火船のいこしうつる船も

浪の喰らひは飯

此半枚
原正本送字

前句とある人の文と見るに
人の文とある文と見るに
まる

いなり小橋とあるは
前句とある名の里とある

山とあるありけりとのあり

干時天保六年未年梅月下旬

筆耕 員之清茶藝古中書

水口



